

海外生活がアイデンティティに与える影響

あるアメリカ在住日本人の経験を通しての考察

田中 真奈美

How the Influence of Living Abroad Lends for a Greater Sense of Personal Identity :
An Inquiry Informed from the Experience of one Japanese Woman Who Has Lived in the US for over Twenty Years
Manami Tanaka

要約

異文化という特殊な環境で生活することによって、どのようにアイデンティティが影響を受けるのかを調査し、長期間アメリカ合衆国で生活することによって変化したアイデンティティを明らかにしたいと考えた。研究・分析方法は、パティシパトリー・リサーチ・メソッド(注)を使用し、ある日本人女性を 20 年以上にわたって追跡調査をした。

アメリカでの長期生活の経験を通し、日本で形成されたアイデンティティのうち保持され変容しなかったアイデンティティは「民族アイデンティティ」であった。アメリカ文化的になった・アメリカの影響を受けて変化したアイデンティティとして、「宗教」、「家族」、「個人アイデンティティ」が挙げられる。特に「個人アイデンティティ」は自己主張の国、アメリカの影響を強く受けた。日本とアメリカの両方を内在している中間的なアイデンティティとして、「地理」と「文化アイデンティティ」があり、長年のアメリカ生活で両方が同等に重要なものとなっている。

キーワード

海外生活、アイデンティティ、在米日本人、民族、文化

1. はじめに

平成 18 年 10 月 1 日現在の全世界に在留している日本人の数は、外務省の海外在留邦人数調査統計によると 1,063,695 人で、前年より、5.05%増加している。海外で生活するようになって、アイデンティティを意識する日本人は多い。筆者自身もそうであった。多民族が生活するアメリカ合衆国では、色々な書類に民族を書く欄がある。日本人であることを意識し始め、自分とは何者かを考えだすケースが多く見られる。在米生活が長くなると、アメリカ文化の影響で自分の考え方や行動が変化してきたことに気づき、アイデンティティの揺らぎが起こることも少なくない。

筆者は渡米当初(1980年初頭)から、アメリカで長く生活している日本人女性が独特な特徴を持っていることに大変興味を覚えた。その頃出会った 60 歳以上の女性たちは皆、とても自己主張が強く、自己中心的で、自分に誇りを持っていた。彼女たちの多くは、結婚を契機に渡米しており、日本で教育

を受けていた。日本文化の中で成人しているのだが、その割には、言葉遣いもとてもストレートなことが多く、日本的な謙遜さはあまり感じられなかった。いったいこの変化はいつごろ何が原因で起こるのだろうか、彼女たちのアイデンティティはどう変化していったのだろうかということに興味を覚えた。

(1) アイデンティティの定義

アイデンティティは、英語では self identity または ego identity という言葉が使用されている。自己同一性、自我同一性などと訳されることが多い。このアイデンティティを提唱したのはアメリカ合衆国の心理学者であり精神分析家であるエリク・エリクソン(Erikson, Erik H. 1902-1994)である。

エリクソン(1959)は、アイデンティティを「自我同一性は、その主観的側面からみると、自我のさまざまな統合方法に対して自己斉一性と連続性が存在するという事実と、これらの統合方法が、他者に対して自分が持つ意味の斉一性と連続性を保障するはたらきをしているという事実の自覚である」、「自

我同一性の感覚とは、内的な斉一性と連続性を維持する個人の能力が他者に対して自分もつ意味の斉一性と連続性が調和することから生じる自信である」と述べている。

谷（2004）は、エリクソンの記述を整理し、自我同一性の感覚は、次の4つの下位概念から構成されることを指摘した。

自己斉一性・連続性：自己の不変性および時間的連続性についての感覚

対自的同一性：自分自身がめざすべきもの、望んでいるものなどが明確に意識されている感覚

対他的同一性：他者からみられているであろう自分自身が、本来の自分自身と一致しているという感覚

心理社会的同一性：現実の社会の中で自分自身を意味づけられるという、自分と社会との適応的な結びつきの感覚

岡本（2002）は「自分がどういう生き方をしたいのか、どんな職業やライフスタイルを選択し、どんな信条を支えに生きていくのかというテーマは、青年期だけの問題であるかといえ、必ずしもそうではない。自分とは何か、本当に自分らしい生き方とはどういうものか、というアイデンティティの問いは、中年期にも現役引退期にも頭をもたげてくる」と述べている。また、「アイデンティティの確立、再確立という問題は、ライフサイクルの節目、節目で重要なテーマであることが分かる」とも述べている。

これらの先行研究から、人生や自己形成におけるアイデンティティの重要性を導き出すことはできた。しかし、具体的に自我・自己を形成しているアイデンティティにはどんなものがあるのだろうか。ダン・ヒンクルマン（Don Hinkelman）と石川園代は10のアイデンティティの種類を挙げている（表1参照）。これらのアイデンティティの集合体が

私たちのアイデンティティであると述べている。

表1 ダン・石川による10のアイデンティティ項目

アイデンティティの要素	定義
地理	住んでいる国や県、生まれ育った場所
文化	自身が属する文化（ろう文化、在日コリアン文化など）
民族	自身が属する民族集団
階級	上流階級、中流階級などの意識
宗教	自身の宗教
職業	自身の職業
性	自身の性や性役割
組織	自身が属する会社などの組織
家族	家族の一員としての意識
個人	自身の性格や特徴

ダン・石川の言うように私たちのアイデンティティは色々な要素の複合体だと考えられる。しかし、どの要素が自己形成に大きな影響を与えるか、自身を表す時に重要なのか、またそれは個人個人違つかなどについては明らかにされていない。

(2) 留学生・長期滞在者のアイデンティティの揺らぎに関する先行研究

戦後、海外へ出かけ、滞在する人が増えてくると、それに関連した研究もされるようになった。留学生に関する先行研究として、稲永・土屋・長谷川・近藤（1965）は、海外生活を体験した多くの人は何らかの心身上の困難を感じており、異なる国民性、民族性、文化、言語などとの接触とそれによって起こる相互作用は、多くの要因が複雑に関連しあっていると述べている。島崎・高橋（1967）は、海外生活の精神衛生についての指針で、健康な人でも、新しい環境に適応するまでの2、3ヶ月から半年は、色々な身体的、精神的な症状を示すと述べている。また、末弘（2006）は1960年代当時は、海外留学生の数も少なく、問題なく帰国している学生が多いため、あまり取り上げられていないと指摘している。

留学や移住の時期によって質的に違いがあるという研究もされている。横田（1997）は高校留学と

大学留学では質的にかなり違いがあると述べ、一括して論じることはできないと指摘している。末弘(2006)は大学以降の留学の特徴として、能動的アイデンティティが確立されていれば、異文化に接触してもアイデンティティに混乱は生じないと述べている。ここでいう能動的アイデンティティとは、自我の欲求と社会的規範の間に立ち、それぞれを能動的かつ主体的に選び取り、更に自己の中にそれらをうまくバランスよく統合できる力を持っている状態のことを言う。

長期の海外生活でのアイデンティティの揺らぎに関する研究として、末弘(2006)は自分から望んで他の文化に同化しようとしても、アイデンティティの混乱や葛藤を生じるケースがあると指摘している。他の文化に好意的であればあるほど、そのことにより、自己の文化への気づきにつながり、混乱を招くと指摘している。箕浦(2003)は、8-9歳に渡米し、7年以上滞在したケースを調査している。箕浦(2003)はアメリカで人格の形成期を過ごす対人関係行動の文化的枠組みが個々人のアイデンティティの一部として組み込まれると述べている。

子どものケースの場合、末弘(2006)のいう能動的アイデンティティが確立していない場合が多いと考えられる。箕浦(2003)もすでにパーソナリティが確立している高校卒業後と13歳半で日本に帰国したケースを比較し、13歳半で帰国した場合、まだ柔軟性があり、日本的考え方を受け入れられると述べている。アイデンティティの揺らぎの原因として能動的アイデンティティが確立されているかどうかを重要になると考える。したがって、能動的アイデンティティが確立されている可能性の低い子どもと確立されている可能性の高い成人を比較することは難しい。

(3) 研究目的

長期滞在によるアイデンティティの変化を長期に

わたって調査したいと考え、個に焦点を当てた研究をしたいと考えた。渡米当初、現地に暮らす日本人女性を見て、日本にいる同年代の日本人とは違うと感じた。しかし、彼女たちは自分たちを何のためらいもなく日本人だと言っていた。そして、そのことにとっても誇りを持っていた。箕浦(2003)は、12年の在米を経て高校卒業後に帰国した男子学生が自分をアメリカ人と規定していると述べている。彼女たちとこの男子学生の違いはどこから来るのか、どうしてためらいもなく日本人と言えるのか、渡米当初から感じているギャップについて、アイデンティティが異文化の影響を受ける部分と受けない部分についての追跡調査を探索的に行うことにした。

先行研究では、アイデンティティの定義、揺らぎ、子どものケースについての研究はあった。しかし、成人してから海外で10年以上長期滞在をした場合、アイデンティティが海外生活を通して、どのように変化していくかを追跡している研究はあまりみられなかった。

そこで、本研究では、一人の成人日本人女性を22年間追跡調査し、その変化をみることによって、海外生活で変化していくアイデンティティと揺るがない部分を明らかにしたいと思う。1)日本で形成されたアイデンティティを保持し、変容しなかったアイデンティティ(以下、日本的アイデンティティと呼ぶ)、2)アメリカ文化的になった・アメリカの影響を受けて変化したアイデンティティ(以下、アメリカ的アイデンティティと呼ぶ)、3)日本とアメリカの両方を内在している中間的なアイデンティティ(以下、中間的アイデンティティと呼ぶ)、4)海外生活の影響を受けたことが確認できなかったアイデンティティ(以下、その他のアイデンティティと呼ぶ)にはどんなものがあるのかそれぞれについて考察する。

異文化で長期に生活することにより「文化アイデ

ンティティ」、「個人アイデンティティ」は確実に影響を受け、同時に日本人であるという民族意識は揺るがないか強くなると推測し、探索的に研究を開始した。

2. 方法

(1) 研究と分析方法

本研究は海外で長期滞在する女性のアイデンティティの変化を調査するために、自由に発言でき、参加者の考え方を引き出せる会話を重視する研究方法を使用したいと考えた。よって、研究と分析方法はパウロ・フレーレ (Paulo Freire) によって 1970 年に開発されたパティシパトリー・リサーチ・メソッド (Participatory Research Method) を使用した。この方法では、インタビューを受ける人 (参加者) に積極的に調査に参加してもらい、研究者のパートナー的な存在となり、インタビューを通して自分の考えを述べるのが要求される。これは、ケイファー (Kieffer) (1981) による「会話による回想」と呼ばれる方法である。研究者は司会者的な存在であると同時に参加者でもあり、参加者の考え方を引き出す役割を担う。

ホール (Hall) (1981) はパティシパトリー・リサーチ・メソッドは研究を通して、外部者である研究者と参加者を結びつけると述べている。理想的には参加者は、研究過程を共有し、自主的な行動を起こし、研究への参加を通し、自身の問題を理解するだけでなく、問題解決のための能力を導き出す方法を学ぶことだと言っている。

パティシパトリー・リサーチ・メソッドでは会話はとても重要な位置を占める。会話は重要な考えを引き出す効果があり、参加者の感情、アメリカで経験している事柄、個人的な考えなどを見つけ出すことができる。

パーク (Park) (1989) によるとパティシパトリー・

リサーチ・メソッドでは、データは調査を通して問題の重要性を発見することを基に、総合的な問題解決のための行動を導き出すために分析される。このために、量・質どちらのアプローチも使用される。いずれのケースでも問題を提示する参加者は大変重要であるが、その一方で分析の可能性を制限することも考えられる。

本研究では、テープから書き起こした会話を、参加者の意図を変えることなく、明確化し、分析した。不明な点やいくつかのテーマに関してはより深く理解するため、後日確認のインタビューを行った。

また、本研究では参加者は 1 名のため量的分析は不可能であったため、質的アプローチを使用した。データを各項目に分類し、その特徴を調査した。

(2) 参加者 久保美月 (仮名) さんのプロフィール

本研究の調査対象者は日本からの長期滞在者久保美月さんとした。久保さんは、1985 年 19 歳の時留学生として、渡米した。その後、現在まで、カリフォルニア州サンフランシスコ近郊に在住している。大学卒業後、大学院に進学し、1994 年に博士号を取得した。その後、日系を始めとする会社や組織で勤務し、幅広い分野での就労経験を積む。現在、日系の非営利団体の事務局長を務めながら、アメリカで生活する日本人・日系人のサポートを行っている。

久保さんの卒業・就職などの転機の時期に計 8 回インタビューを行った。なお、研究開始当初は長期滞在予定の 3 名の女性にインタビューを行っていたが、内 2 名は諸事情により帰国し、結果研究対象は久保さん 1 名となったことを付記しておく。

(3) 研究手順

1) 研究の趣旨を説明し、参加者を募った。参加者にパティシパトリー・リサーチ・メソッドの研究方法の説明をし、同意を得た。

2) 先行研究で指摘されているアイデンティティの要素を基に質問項目を作成した。

3) 各時期(計8回)で、同じ質問項目を使用してインタビューを行った。

インタビューは許可を得て録音した。

- | | | |
|--------------|------|-------------|
| 1. 渡米直後 | 19 歳 | 1985 年 2 月 |
| 2. 大学卒業時 | 22 歳 | 1988 年 1 月 |
| 3. 大学院修士号修了時 | 25 歳 | 1990 年 6 月 |
| 4. 大学院博士号修了時 | 29 歳 | 1994 年 6 月 |
| 5. 就職後 1 年 | 31 歳 | 1995 年 6 月 |
| 6. 就職後 5 年 | 35 歳 | 1999 年 6 月 |
| 7. 就職後 10 年 | 40 歳 | 2004 年 6 月 |
| 8. アメリカ国籍取得時 | 42 歳 | 2006 年 11 月 |

4) 各インタビュー後、テープから会話の内容を全て書き起こした。

5) 質問事項に基づく会話の内容から、アイデンティティの変化を調査し、分析した。

質問項目

- 1) あなたの文化アイデンティティは何ですか。思いつくことを答えてください。
- 2) あなたの民族アイデンティティは何ですか。思いつくことを答えてください。
- 3) あなたの宗教アイデンティティは何ですか。思いつくことを答えてください。
- 4) あなたの組織・所属アイデンティティは何ですか。思いつくことを答えてください。
- 5) あなたの地理的アイデンティティは何ですか。思いつくことを答えてください。
- 6) 「あなたのアイデンティティは何ですか」と聞かれた時、何と答えますか。思いつくことを答えてください。
- 7) その他、アイデンティティと聞いて、思うことや考えを話してください。
- 8) 他に何か話したいことはありますか。

(4) 分析方法

分析方法は 2(1) で述べた通りある。

3. 結果と考察

(1) 形成されたアイデンティティの変容

それぞれの時期に質問項目に基づいてインタビューした結果を自由発言の部分も含めて、ダン・ヒンクルマン (Don Hinkelman) と石川園代による 10 のアイデンティティの種類に分類し、それをさらに 1) 日本的アイデンティティ、2) アメリカ的アイデンティティ、3) 中間的アイデンティティ、4) その他のアイデンティティの 4 つに分類した。(表 2、表 3、表 4、表 5 参照)。

表 2 日本で形成されたアイデンティティを保持し、変容しなかったアイデンティティ

時期	民族
渡米時 19 歳	日本
大学卒業時 22 歳	もちろん日本民族です
大学院修士号修了時 25 歳	日本人であり、名古屋人
大学院博士号修了時 29 歳	日本人であり、名古屋人
就職後 1 年 31 歳	サンフランシスコで生活する日本人
就職後 5 年 35 歳	サンフランシスコで生活する日本人
就職後 10 年 40 歳	サンフランシスコで生活する日本にルーツを持つ日本人
アメリカ国籍取得時 42 歳	アメリカ国籍を持つ日本生まれの日系人

表3 アメリカ文化的になった・アメリカの影響を受けて変化したアイデンティティ

時期	宗教	家族	個人
渡米時 19歳	特にない	名古屋の3人娘の次女	気が小さくて、引っ込みぎみ
大学卒業時 22歳	意識したことはないが、やはり神道と仏教なのではと思う	名古屋のお嬢さん	人と話すのが好きな明るい性格でも寂しがり屋
大学院修士号修了時 25歳	文化背景として仏教	やっぱり家族は名古屋の両親と姉妹	人と話すことが好きだし、外交的な面もあることに気がついた
大学院博士号修了時 29歳	神道	結婚したので妻	甘えることや人に頼ることも好きで、必要と感じている
就職後1年 31歳	神道	妻	教えることが好きな先生タイプ
就職後5年 35歳	神道と仏教	妻であり両親の子供	人に関わることが好き、イベントをしたり、人の世話をすることが楽しい
就職後10年 40歳	神道と仏教	妻であり両親の子供	人に関わること、教える事が好き 面倒見がいいお姉さん
アメリカ国籍取得時 42歳	神道と仏教	妻であり両親の子供	日米の両国の人のサポート、人の交流の楽しさ

表4 日本とアメリカの両方を内在している中間的なアイデンティティ

時期	地理	文化
渡米時 19歳	日本・名古屋	日本
大学卒業時 22歳	サンフランシスコに住んでいるが基本は日本	日本文化で日本で生まれたことを誇りに思う
大学院修士号修了時 25歳	日本とサンフランシスコ	日本文化であるが、アメリカ文化も理解できる
大学院博士号修了時 29歳	日本とサンフランシスコ	サンフランシスコの日系学生文化
就職後1年 31歳	名古屋生まれの名古屋育ちで現在サンフランシスコに在住	名古屋の文化と日系文化
就職後5年 35歳	日本にルーツを持つサンフランシスコ在住者	日本文化とアメリカ文化
就職後10年 40歳	日本にルーツを持つサンフランシスコ在住者	日本文化と日系文化とアメリカ文化
アメリカ国籍取得時 42歳	第2の故郷サンフランシスコ	20年前の日本文化と日系文化とアメリカ文化

表5 海外生活の影響を受けたことが確認できなかったアイデンティティ

時期	階級	職業	性	組織
渡米時 19歳	上流階級	学生	女性	大学のESL
大学卒業時 22歳	上流階級の中ぐらい	変わらず学生	女性であり、子供を産む性	大学院
大学院修士号修了時 25歳	上流階級の中ぐらい	フルタイムの学生	女性でありストレート	大学院
大学院博士号修了時 29歳	中流階級の下	プロフェッショナルの学生	女性であり妻	まだ大学院かな
就職後1年 31歳	中流階級の下	教師	女性であり妻	学校と日本語教師会
就職後5年 35歳	中流階級の中	教育者	女性であり妻 ストレート	学校と日本語教師会 日系社会
就職後10年 40歳	中流階級	教育者 コンサルタント	女性であり妻 ストレート	学校と日本語教師会 各組織の理事、日系社会
アメリカ国籍取得時 42歳	中流階級	教育者 コンサルタント 日系社会の次世代リーダー	女性であり妻 ストレート	日本語教師会 各組織の理事、日系社会

(2) 日本で形成されたアイデンティティを保持し、
変容しなかったアイデンティティ

日本的アイデンティティはやはり「民族アイデンティティ」である。このことは、末弘(2006)が「大学以降の留学の特徴として、能動的アイデンティティが確立されていれば、異文化に接触してもアイ

デンティティに混乱は生じない」と指摘することと一致している。

久保さんは、渡米により、日本人であることを強く意識するようになった。同時に名古屋人であることも留学仲間の日本人との交流、日系社会との交流によって意識するようになってきた。アメリカでの

生活が長くなるにつれて、日本で暮らす日本人との違いを意識するようになり、日本人と簡単に言えなくなってきた。国籍を取得した時から、日系人という言葉を使用するようになったが、アメリカ生まれの日系人と区別するため、日本生まれという言葉を使用している。このことに関連して久保さんは、「アメリカ人にジャパニーズ・アメリカンかと聞かれた時、ジャパニーズ・ジャパニーズと答えています。彼らにとってジャパニーズ・アメリカンはアメリカで生まれ、教育を受けた人を言うことが多いですから」という話をしてくれた。これはまた違う面から見ると、自分のルーツが日本であることを常に意識しており、自分の中でとても大切にしている表れでもあり、久保さんにとって「民族アイデンティティ」が日本にあることを物語っている。

同時に「民族アイデンティティ」が久保さんの自己形成・アイデンティティで大きな位置を占めていることも分かった。「あなたのアイデンティティは何ですか」、「アイデンティティと聞いて、思うことを述べてください」の質問や自由発言から、久保さんが一番に思いつくのは日本人という言葉で、それが自分のアイデンティティの大きな部分を占めていると語り、久保さん自身も強く自覚していた。

(3) アメリカ文化的になった・アメリカの影響を受けて変化したアイデンティティ

「宗教」、「家族」、「個人アイデンティティ」がこれに当たる。これらの特徴は先行研究では見られなかった。

日本人はとかく宗教観が薄いといわれているが、久保さんも日本在住中は、宗教を意識したことはまったくなかった。アメリカでの生活の中で、日本が仏教文化に根ざしていることに気付き、仏教を意識し始める。その後、四季折々の行事に神道が深く関わっていることに興味を覚え、意識するようになってくる。最終的に、文化背景としての神道と仏

教を「宗教アイデンティティ」として挙げていることから分かる。

久保さんは、アメリカ生活の中で、アメリカ人はきちんと自分の宗教を持っており、毎週教会に行くのは普通のことであることを知った。イベントなどが日曜日の午前中に少ないのは皆が教会に行くからだと言われ、驚いたと話してくれた。また、アメリカ文化がキリスト教に基づいていることを実感するようになると、自分自身の道徳観は何から来ているか考えるようになった。今ではアメリカ人に宗教はと聞かれて、仏教と神道と自然に答えるようになった。

「家族アイデンティティ」もアメリカ生活によって変化したものの一つである。個人主義の国だと思っていたアメリカが実は家族を大切にする国であることを、サンクスギビングやクリスマスの行事で知ることとなった。久保さんの友人でアメリカ人と結婚した日本人から、「サンクスギビングやクリスマスは本当に大変。家族が集まる日なので、夫の実家に行かなければならないし、プレゼントも用意しなければならぬし、折角の休みなのに友達と旅行にも行けない」と聞いて、アメリカ人がとても家族を大切にしていると知ったと話していた。

また、同時多発テロの後、何が起こるか分からないから家族の近くにいたいと仕事を辞めて実家のミネソタ州に帰った友人を見て、改めて自分の家族、つまりルーツを意識するようになった。

久保さんの「家族アイデンティティ」は初めは両親の娘であったが、結婚により妻となった。母親が病気になってから、再び両親の子どもであることも強く意識し始めた。日本にいたら、こんなに強く両親のことを思ったり大切にしなかったのではと語っていた。両親に何か起こった時、間に合わないということにとっても罪悪感を持っていると語った。大学生時代の日本人の友達が少なかった頃は、正月に実家

に帰ることなど考えもしなかったし、友達と大晦日を過ごすことを楽しみにしていたが、今では休暇が取れば、出来るだけ日本の実家に帰り、両親と正月を過ごすようにしていると話していた。現在、妻であり両親の子どもというのが一番久保さんのアイデンティティを表しており、新しい自分の家族と同時に両親という自分のルーツを大切にしていることが伺える。

「個人アイデンティティ」は久保さん自身もアメリカ生活で大きく変わったと話していた。気が小さくて、引っ込みぎみであったが、人と話すことが好きだし、外交的な面もあることに気がついた。また、教育の世界に携わることで、教えることが好きな先生タイプであることも自覚した。人に関わるのが好きで、イベントをしたり、人の世話をすることが楽しいとも感じ始めた。最近是人との交流の楽しさを再確認している。

日本にいても仕事を始めたら当然性格は少しは外交的に変わったかもしれない、と久保さん自身も話していた。しかし、自分の意見をきちんと言えないと認めてもらえない、自分が強くなれないといけない、自己主張が大切なアメリカで生活しなかったら、こんなに変化することはなかったと思うと言っていた。日本にいたら、普通の会社員になって、そのまま結婚して母親になっていたと思うと語っていた。

(4) 日本とアメリカの両方を内在している中間的なアイデンティティ

「地理アイデンティティ」と「文化アイデンティティ」は日米の両方を持っている中間的アイデンティティと言える。渡米により出身地の名古屋の特異性を改めて意識するようになり、アメリカでの生活が長くなるにつれて、日本とサンフランシスコの両方に心の拠り所を感じてきた。20年以上日本とアメリカを行き来しながら、日本のルーツをしっかりと意識してきた。国籍を取得した42歳の時に、

サンフランシスコを第二の故郷と決めたようである。現在、久保さんには日本とアメリカの二つが内在し、どちらも同等に大切なものとして意識されている。

久保さんは、渡米により日本文化を意識するようになった。このことは末広(2006)の研究を裏付けている。末弘(2006)は他の文化に好意的であればあるほど、そのことにより、自己の文化への気づきにつながると指摘している。

学校生活を通し、アメリカ文化にも触れるようになり、違いを意識し始めた。茶道をサンフランシスコで再び習い始めたことにより、同じ日本の中でも文化やしきたりが違うことを意識し始め、出身地名古屋の文化を意識するようになった。同時に、日系文化とも接触が始まり、サンフランシスコ日系社会の独特の日系文化が生活に影響を与え始めた。

仕事を始めてからは、アメリカ文化に触れる機会が増え、アメリカ人の友達も増えた。仕事を含めアメリカ式の社交をする機会も、多くなってきている。末弘(2006)が指摘するように久保さんもアメリカの文化に同化しようとして、アイデンティティの混乱や葛藤を生じた。日本とアメリカで習慣が違う場合、自分がどういった態度をとればいいのか悩んだと話していた。今では、時と場合に応じて使い分けることができるようになってきたという。現在久保さんには3つの文化、日本文化、日系文化、アメリカ文化が内在し、どれも久保さんにとって同等に大切な文化である。

よくアメリカ人の友人から、「久保さんはとてもアメリカ的な日本人ですね」と言われるそうで、このことも久保さんにアメリカ文化と日本文化が内在していることを表している例と言える。

(5) 海外生活の影響を受けたことが確認できなかったアイデンティティ

「階級」、「職業」、「性」、「組織アイデンティティ」

は特にアメリカ生活が影響を与えたものではない。「性アイデンティティ」の意識の中でストレートという表現があり、それは、同性愛者が多いサンフランシスコという土地柄の影響を受けているが、それによって「性アイデンティティ」が変化した訳ではない。

同様に「階級アイデンティティ」もそうである。両親に金銭的な援助を受けていた学生時代は、かなり裕福な学生生活を送ることができ、金銭的な問題を感じる事はなかった。卒業後、結婚をし、専業主婦だった頃に、初めて生活の大変さを経験した。その後、仕事を始め、収入が安定してくるに伴い、「階級アイデンティティ」も上昇している。久保さんから、特にアメリカで生活していたから起こりえた「階級アイデンティティ」に影響を与えた経験や、日本人であることによる差別的な経験から起こる「階級アイデンティティ」への影響についての発言はなかった。そのため、「階級アイデンティティ」がアメリカ生活の影響を受けたという事柄は確認できなかった。

「職業アイデンティティ」は、10年近く大学、大学院の学生として生活していたため、職業は学生を挙げている。フルタイムの学生、プロフェッショナルの学生という表現が面白い。学生を職業として強く意識している表れであるが、別の側面も考えられる。大学院時代、すでに高校時代のクラスメートは就職し、社会で活躍していたが、久保さんはまだ学生であった。クラスメートから自分は遅れているのではないかという不安を拭い去るためにフルタイムの学生、プロフェッショナルの学生という表現を使ったのではないと思われる。

その後、教育の世界で活躍し、教育者を自分の職業として意識する。また、国籍取得により、日系社会を担っていく次世代リーダーとしての自覚も生まれてきた。このことは現在の職業である日系 NPO

の事務局長という立場から、日系社会に深く関わり、日系社会を大切にしていきたいという気持ちの表れでもある。

久保さんから、アメリカで生活しているからという理由で職業を選んだという発言はなかった。日本にいたころから教育には興味があり、いずれ関わっていきたくて考えていたそうであり、日本にいたとしても教育には携わっていたと思うと話していた。日系社会の次世代リーダーという自覚はアメリカ生活や日系社会との関わりから生まれてきた意識ではあるが、日本で生活していた場合、同様にある組織と関わり、その組織のリーダーとなる可能性がなかったとは言い切れない。また、筆者の経験から、サンフランシスコで長期間生活している久保さんと同年代の人が同じように次世代のリーダーという意識を持っているとは思えないし、むしろそういう意識のある人の方が珍しい。それゆえ、「職業アイデンティティ」がアメリカ生活の影響を受けたと確認することは難しいと言える。

学生時代は在籍していた大学が「組織アイデンティティ」の中心で、その中で日本人会に所属したりしていた。卒業後、教育の世界に入り、各種の日本語教師会や学会に所属するようになった。日系社会との関わりができるとそこも活躍の場の一つになってきた。NPOを始め、教師会、小学校の保護者会、茶道の会の理事も務め、サンフランシスコの色々な組織に所属するようになった。

「組織アイデンティティ」に関する発言の中で、日本的な組織に対する忠誠心や所属意識に関する発言やアメリカ的な所属意識的な発言はなかった。自分が関わっている組織、会、グループの名前を挙げて、アメリカ生活が長くなるにつれてつながりが増えてきたと述べていた。久保さんは日本にいた高校時代、茶道をはじめ、色々な集まりに参加していた。久保さん自身、昔から色々なことに興味があり、時

間の許す限り沢山のことを経験していきたいと話していた。このことから、「組織アイデンティティ」の変化がアメリカ生活の影響を受けたとは言えないと考える。

4. 結論

本研究から、海外在住の長い日本人のアイデンティティに関して次の点が明らかになった。先行研究の知見と一致したことから次のことが挙げられる。横田（1997）の指摘の通り、大学留学の場合は質的に違いがあることが確認できた。筆者の経験からサンフランシスコ近郊でも中学・高校で留学した場合、アイデンティティに揺らぎが起こったケースが多く確認できた。中学3年に渡米した女子生徒の場合、学校に日本人がいなかったこともあり、高校での友人はアメリカ人のみであった。そのため、日本人であるという「民族アイデンティティ」に揺らぎが起こり、現在、自己形成に問題を抱えている。

本研究の参加者は大学留学であり、「民族アイデンティティ」は確立していたと言える。このことは日本的なアイデンティティが「民族アイデンティティ」であったことから分かる。「民族アイデンティティ」の確立を介して自己のアイデンティティを主体的に選び、統合できる力、能動的アイデンティティが確立していたと言える。そのため、上述の中学生のケースのようなアイデンティティの揺らぎは起こらなかった。これは、末弘（2006）の能動的アイデンティティが確立されていれば異文化に接触してもアイデンティティに揺らぎは生じないという研究を支持するものである。

末弘（2006）の指摘の通り、異文化に触れる事によって自文化への気づきが起こることや他の文化に同化しようとして、アイデンティティに混乱や葛藤を生じることも本研究から確認できた。

島崎・高橋（1967）の研究を支持する結果とし

て健康な人でも、新しい環境に適応するまでに色々な身体的、精神的な症状を示すことも明らかになった。本研究では、最初の半年間は精神的に不安定になることや体調が悪くなるがあったことが面談を通じて分かった。

先行研究に見られなかった事柄として、新しく次のことが分かった。

「宗教」、「家族」、「個人アイデンティティ」は、アメリカでの生活が大きく影響を与えた。宗教を大切にしているアメリカでの生活が宗教を考えるきっかけとなった。宗教はと聞かれて、「仏教と神道」と答えるようになったことは、自身の倫理観を形成しているものとして宗教を捉えていることを表している。個人主義のアメリカが実は家族を大切にしている国だと認識することによって、自身のルーツである両親を大切に考えるようになったということもアメリカ生活から得られたものだと言える。また、自己主張をしなければならない国での生活が、「個人アイデンティティ」である性格を大きく変えたということも明らかになった。

海外生活の影響を受けたことが確認できなかったものが、「階級」、「職業」、「性」、「組織アイデンティティ」であることが本研究から分かった。これらのアイデンティティは確かに生活の中で変化していったが、特に海外生活という特殊な環境が影響を与えたと言える事例は見つけられなかった。

久保さんの事例から、「民族アイデンティティ」が長期滞在によって大きく意識されることが分かった。また、「文化アイデンティティ」は日本を強く残しながらもアメリカ的な部分が増加し、日米両方が内在することも明らかになった。このことは、筆者の渡米当初から感じている在米生活の長い日本人女性の特徴と共通している。本研究から得られた結果の知見をもとに、今後、より多くの長期滞在者にアンケートやインタビューを行い、本研究の妥当性

を検証する必要があると考えている。

(注) パティシパトリー・リサーチ・メソッド (Participatory Research Method) の的確な和訳が見つからなかったため、カタカナ表記とした。

参考文献

- 稲永和豊・土屋直裕・長谷川和夫・近藤喬一 (1965). 「米国における日本留学生の生活適応」『精神医学』第7号: p413 医学書院
- 岡本祐子 (2002). 『アイデンティティ生涯発達論の射程』 ミネルヴァ書房
- 島崎敏樹・高橋良 (1967). 「海外留学生の精神医学的問題(その1) 留学中の精神障害例ことに精神分裂病とうつ病について」『精神医学』第9号 No.8: 20-27. 医学書院
- 末弘美樹 (2006). 『日本人留学生のアイデンティティの変容』 大阪大学出版会
- 谷冬彦・宮下一博 (2004). 『さまよえる青少年の心 アイデンティティの病理 発達臨床心理学的考察』 73-74, 209-214 北大路書房
- 箕浦康子 (2003). 『子供の異文化体験: 人格形成過程の心理人類学的研究』 新思索社
- 横田雅弘 (1997). 「青年期における留学のインパクト」『文化とこころ 日本人の異文化生活と文化葛藤』第2号 No1 相川書房
- Erikson, E.H. (1959). Identity and the life cycle. New York: International Universities Press. 小此木啓吾 (編訳) 1973 自我同一性 誠信書房
- Freire, P. (1970). Pedagogy of the oppressed. New York, NY: Continuum Press.
- Hall, B. (1981). Participatory research, popular knowledge and power: A personal reflection. Convergence. 14(3), 6-17.
- Kieffer, C. (1981). Doing dialogic retrospection: Approaching empowerment through participatory research. Edinburgh, Scotland: Paper presented at the International Meeting of the Society for Applied Anthropology, University of Edinburgh.
- Park, A. (1989). What is participatory research? Unpublished manuscript, Amherst, MA: University of Massachusetts at Amherst, School of Education.
- 外務省 平成18年度の海外在留法人数調査統計 外務省 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/07/pdfs/1.pdf> 平成19年8月 (2007年12月11日)
- ダン・ヒンクルマン (Don Hinkelman)・石川園代 異文化間コミュニケーション基礎 多文化ネット <http://www.ta-bunka.net/info/j.html> (2005年2月15日)